



とおかまち地区<第2期>

(新潟県十日町市)

- 計 画 期 間 平成 24 年度～平成 29 年度
- 面 積 100 h a
- 交付対象事業費 3,600 百万円
- 市人口 53,681 人 (地区内人口 4,111 人)

ポイント

十日町市中心市街地の再生・活性化

地区概要

中心市街地の都市基盤や住環境を整備することで定住人口減少に歯止めをかけ、まちなかの拠点を活かした都心核形成により、中心市街地の再生・活性化を図る。

目 標

「新たなにぎわい」に満ちた「魅力あるまち」の創造 ～“安心・快適・ときめき”のまちの形成～

- ◇ 雪国でも快適で安心して暮らし続けられるまちづくり
- ◇ 人が集い、活気とふれあいに満ちたまちづくり

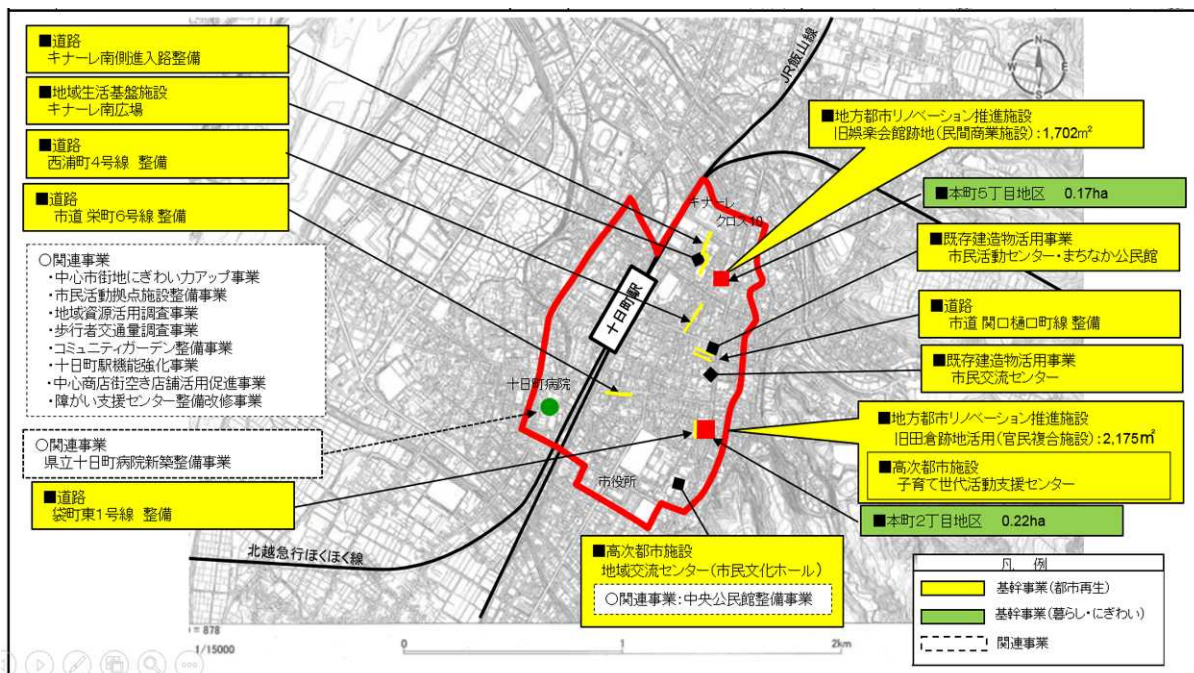
指 標

中心市街地内の居住人口や区域内の歩行者・自転車交通量や有料駐車場利用台数の増加を中心市街地の再生・活性化を図る指標とする。

中心市街地内の居住人口の社会動態	-85 人 (H23)	→	-22 人 (H28)
歩行者・自転車交通量(平日)の増加	5,841 人/日 (H23)	→	4,088 人/日 (H28)
文化・活動施設の利用者数及び野外活動者数	126,682 人/年 (H23)	→	188,169 人/年 (H29)
(仮称)産業文化発信館利用者数の増加	4,000 人 (H24)	→	14,371 人 (H27)

事業内容

基幹事業 (3,600 百万円) → 道路 (5 路線 W=4~10m L=1,088m)、広場 (1 箇所)、地域交流センター (市民文化ホール)、子育て支援センター、既存建造物活用 (2 棟)、地方都市リノベーション推進施設 (2 棟)



地区の現況と課題

現況

本地区は、JR 十日町駅・ほくほく線十日町駅を中心とした都市機能及び商業の拠点となる中心市街地であるが、地場産業であった織物業の衰退と共に、老朽化した空きビルや工場跡地等が点在しており、にぎわいと活気のあるまちなか形成の推進が求められていた。

課題

○人口減少と少子高齢化への対応

市全体に比べ中心市街地の人口減少と少子高齢化の進行は早く、その傾向は今後も進むことが予想されるなか、サービス付き高齢者向け住宅「アップルとおかまち」の整備等により、人口減少の抑制と安心して快適な居住環境の提供に寄与した。

○老朽化した空きビルや遊休地の活用

商業・織物工場の空きビルや空き地が点在し、近隣住民から危険性や治安悪化を危惧する声も多くあった。さらに中央公民館や市民会館といった公共施設の老朽化が進み、活動拠点が脆弱化していたが、商業ビル跡地に産業文化発信館「いこて」が整備されたことで来街者の回遊性が高まり、工場跡地等の遊休地には地域交流センター「段十ろう」などが建設されたことで、市民交流の場を創出した。

○商業・都市、コミュニティ機能の再生

郊外型大規模小売店舗の進出や中心市街地の大型集客施設の廃業などにより、中心市街地の商業機能と回遊性が低下しており、市民アンケートでは、地域密着型の魅力ある商店街づくりを求める声や空き地等をカルチャー施設として活用して欲しいという声強いなか、市民交流センター「分じろう」市民活動センター「十じろう」などのまちなかステージが形成されたことで、市民のコミュニティ活動や交流が促進された。

計画策定プロセス

十日町市総合計画（後期基本計画）

総論（計画期間：平成 23 年度～平成 27 年度）の「まちづくり重点方針Ⅱ：活力ある元気なまちづくり」にて「交流拠点の機能を増強させながら、中心市街地の再生・活性化を図る」とされ、重点施策は「交流人口の増加による中心市街地の再生」とされた。

十日町市都市計画マスタープラン

将来都市構造の方針において「市街地形成ゾーン」として賑わいの創出に努め、「都市拠点」として商業機能の集積を図るとともに、活力ある都市づくりを担う都市基盤の整備を推進する」とされた。

十日町市中心市街地活性化基本計画

平成 22 年度より新中心市街地活性化基本計画の策定に取組み、市民や商店街振興組合、十日町 TMO といった関係団体ともワーキングを重ね、基本計画の策定を行った。平成 25 年 6 月に認定を受け、都市再生整備計画区域と中心市街地活性化基本計画区域は一致したエリア設定としている。



▲H16 中越地震により被災し撤退した大型商業ビルや、廃業した工場跡地等が市内に点在・・・



▲産業文化発信館「いこて」



▲地域交流センター「段十ろう」



▲▼「分じろう」「十じろう」の施設設計における協働の取組みは、グッドデザイン賞ベスト 100 を受賞

